

原爆文学研究会報

第二六号

原爆文学研究会 二〇〇九年三月

手紙 先日ある手紙に思わずニヤリとさせられた。袖井林二郎『拝啓 マッカーサー元帥様』（岩波現代文庫）で紹介されていたその手紙は、一九四九年一月に、ある日本人がマッカーサーに書き送ったものであった。その人物は同年八月にソ連が初の核実験を行ったことを憂えて筆を執ったらしい。差出人は（ソ連も原爆を開発したというアメリカ政府の過日の発表は、日本国民に驚きと懸念をもたらし、アメリカの軍事力に対する彼らの信頼をある程度ゆるがした）ので（原爆の威力とアメリカ合衆国陸海空軍の軍事力を示す）巡回展を日本全国で開催したいのだという。そのために（映画・写真その他の器材）を貸してほしいというのがその手紙の趣旨である。差出人は（「日本国民」を（彼ら）と呼び、あたかも自分だけはアメリカの「威信」を疑っていないかのような書き方をしている。しかし、わざわざマッカーサーに手紙を書かずにいられたかったこと自体に、当人の強い不安が表れている。私は彼の虚勢に思わず唇を曲げた。

だが、考えてみれば、彼のようにアメリカの強力な軍事力を信じようとし、それに依存しようとする心性は私の中にもあるのだ。バラク・オバマが「核なき世界」を目指すと言ったという報に触れたとき、私は大変望ましいことだと思おうと同時に、でもせいぜい核軍縮止まりではないのかと疑い、さらに「核なき世界」で日本はどのようにに自国を防衛して行けば良いのだろうかとチラリと「不安」を感じてしまった。自分はいったいこの研究会で何を学んできたのだろうかと我ながらがっかりもしたが、それでも私は彼の手紙を笑わないう地点から原爆について考えていきたいと思っている。彼の虚勢を

笑うことは私の虚勢でしかないからだ。

手紙にはマッカーサー側から（わざわざアメリカの軍事力の展覧会を開催してわからせることが、世界の中で日本ほど不必要な国はまづないであろう）という回答がなされたのだという。これを受け取ったときの彼の面持ちはどのようなものだったろうか。（中野和典）

第二六回 原爆文学研究会報告

二〇〇八年一月二〇日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した第二六回研究会には約二〇名が参加。

田崎氏の発表については「浦上天主堂だけではなく原爆ドームも聖地化されていくが、どのような相違があるのか」「何を期待して日本の作家は原爆投下爆撃機のパイロットを描くのか」等の質疑がありました。

松永氏の発表については「同時多発テロ以後に書かれたこの小説はどのような文脈で読まれているのか」「なぜ一見明るいイメージを持つブギウギがヒロシマのイメージに結びつけられているのか」等の質疑がありました。



◇ 研究発表1

「マリアの首」の系譜

—— 田中千禾夫・井上光晴・青来有一・田口ランディ ——

田崎 弘章

原爆投下から既に六十年以上が経過した今もなお、「原爆」をテーマにした文学作品が生産されていること自体、驚くべきことなのかもしれない。近代以降の「小説」が「ノベル」(新奇さ)であるのならば、同じ事件を題材にし続け、読者をうんざりさせることは、作家の怠慢だということになるからだ。しかし、同じテーマが反復され続けていることは、そのテーマの重要性、普遍性の証左でもある。では、「原爆」を文学作品に描くことの重要性、普遍性とは何であろうか。

「反核・平和」という、誰も異議を唱えることのできない正義のスローガンを導く証明過程として、原爆文学は存在するのだろうか。あるいは、非業の死を遂げた被爆者の魂を鎮め、今なお後遺症に苦しむ被爆者の胸の内を吐露もしくは代弁するために、原爆文学は存在するのだろうか。あるいはまた、原爆を投下されるまでに至った「日本」の戦争犯罪を告発するために、いや逆に、原爆投下で無辜の民を虐殺した「アメリカ」に抗議するために、原爆文学は存在するのだろうか。あるいは…?

恐らく、これらの問いは全てが正解であり、間違いである。原爆を巡る言説には、発せられると同時に、「くのために」存在する政治的なものとして解釈されることを受け容れざるを得ない側面がある。しかし、どのような原爆文学作品にも、それが文学作品であるがゆえに、「くのために」存在するという存在の仕方から零れ落ち

てしまうものがあることもまた、確かなことであるように思う。この零れ落ちるしずくが何であるのか、それを的確に言い表すことが容易ではないにしても…。

私は、長崎原爆を巡って書かれた幾つかの文学作品の中に、奇妙な符合があることに気づいた。田中千禾夫の『マリアの首』(一九五九年)、井上光晴『地の群れ』(一九六三年)、青来有一『椿崎礼拝堂』(一九九五年)、田口ランディ『被爆のマリア』(二〇〇五年)。時代も作者も異なるこれらの作品群は、全て原爆で破壊された浦上天主堂のマリア像を重要なモチーフとしている。これらの作品群を時代順に読む時、被爆したマリア像の首が、あたかもラグビーボールのように、遠い彼方にあるゴールラインを目指して、次々とパスされていくかのような印象を受ける…。

更に比喩的に語ることを許してもらえば、この「マリアの首」こそが、原爆文学作品に対する安易な政治的解釈から零れ落ちてしまふ「しずく」の、一つの形なのかもしれないと思う。

ユダヤ・キリスト教の厳密な教義では、偶像崇拜は認められない。被爆した石の「マリアの首」を拝み、憎み、あるいは心の拠り所とする主人公たちの心性は、きわめて日本的でもある。「マリアの首」は元々キリスト教の聖像でありながら、アメリカ人(キリスト教徒)の手によって、生身の日本人とともに原爆で焼かれたがゆえに、日本人に訴えかける「たましい」を宿した存在となった。これは、近代以降、キリスト教国の文化文明に憧れ、懸命に導入・受容してきた日本人の手に、キリスト教国からもたらされた焼け焦げたアイコンなのである。

作家たちが、このアイコンをいかに作品の中に描いたか。その系譜を辿ることで、原爆文学の中を浸み通るしずくのゆくえを見極めたいと思う。

解体される「ヒロシマ」の「平和」

—ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ—アトム57』

松永 京子

「ポスト・インディアン作家」として知られるジェラルド・ヴィゼナー（アニシナベ族）の『ヒロシマ・ブギ—アトム57』（二〇〇三年）は、広島平和記念資料館や平和公園に代表される「平和」の概念を欺瞞と見なし、ゲリラ的破壊行為を繰り返す混血戦争孤児ローニン・アイノコ・ブラウンを主人公とした小説である。本発表では、『ヒロシマ・ブギ』を北米先住民文学の枠組みから捉え、ヴィゼナーがどのような手法やレトリックを用いて「ヒロシマ」の「平和」を解体しようと試みているのか、またその試みをどのように評価することができるかという点について考察した。

まず、核戦略や核産業による侵略の歴史を米国における植民地主義の長い歴史の一環として描いてきたこれまでの先住民文学を概観し、ヴィゼナーが核問題をポスト植民地時代のトランスパシフィックな被爆体験へと敷衍していることを確認した。アニシナベ族出身のオリオン・ブラウン（通称ナイトブレイカー）は、占領軍の通訳として原爆投下直後の広島で入市被曝し、帰国後ネバダの核実験場で二度目の被曝をしている。ナイトブレイカーといえ、アメリカ兵士が米政府の実験台としてネバダ実験場で被曝した過去を暴いた同名のテレビ映画が思い出されるが、ヴィゼナーが注目したのはアメリカ兵士として被曝する先住民といった

ポスト植民地時代のアイロニーであった。

このような被爆体験を持つオリオン・ブラウンとブギウギ・ダンスである日本人女性オキチとの間に生まれたローニンは、「日本は憲法第九条を改正し、核兵器を所有すべきだ」と発言したり、資料館の展示物を化学薬品で溶かしたり、平和公園に配置された「平和の池」に火を放つたりといった破壊行為を繰り返す。こういったローニンの過激なパフォーマンスやレトリックを分析することで見えてくるのは、核のポリテイクスの現状維持のために捏造された便利な符号としての「ヒロシマ」の「平和」を俎上に載せることで、被爆者の「サバイバンス」（ヴィゼナーの造語。「犠牲者」としての立場を拒絶し多数派の支配に抵抗しながら生き延びるという意味）を取り戻そうとする作者の意図である。

ヴィゼナーの試みは、先住民文学や文化で重要な存在とされてきたトリックスターの概念を採用することでさらに明らかになる。トリックスターは一般的に、いたずらをしたり社会の秩序をかき乱したりすることで「文化を活性化させたり、社会関係を再認識させたりする役割を果たす」と言われているが、ヴィゼナーが特に注目したのは、人間を殺すことや権力を支配することのない「情け深い」性質であった。ローニンのアイロニカルで捕らえ所のない性質はまさにトリックスターそのものであり、常に原爆で死んでいった子供たちの立場に身を置く姿勢はその倫理的側面を体現している。このような部族的手法はヴィゼナーの核の言説をより幅広いものにしていくといえよう。

*

*

今回の発表の大きな目的は、先住民文学の枠組みから原爆問題を論じる可能性を探ることにありました。質疑応答では多くの鋭いご指摘やご意見を頂き、本研究をさらに深めていく必要性を痛感しました。深く感謝申し上げます。

彙報

第二六回 原爆文学研究会

○日時 二〇〇八年二月二〇日(土) 一三半時より

○会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号教室

○研究発表

「マリアの首」の系譜

——田中千禾夫・井上光晴・青来有一・田口ランディ——

田崎 弘章

解体される「ヒロシマ」の「平和」

——ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギーマトム57』

松永 京子

○報告

聞き書きから散文詩へ

中原 澄子

編集後記

いよいよ九州大学六本松キャンパスが移転するため、二〇〇八年二月二〇日の会は六本松で開催する最後の原爆文学研究会になりました。二〇〇一年一月二二日にここで第一回研究会を開催して以来さまざまな場所で研究会を行ってきましたが、本会にとって六本松は「拠点」とも言うべき場所でした。

以下にこれまでの会場を挙げます(括弧内は研究会の回数)。九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号教室(一・三・五・七・九・一一・一三・一五・一八・一九・二〇・二二・二三・二六)、長崎大学学文教キャンパス教育学部棟会議室(二・四・六)、広島市まちづく



り市民交流プラザ(八)、佐世保工業高等専門学校多目的教室(二〇)、大分県立芸術文化短期大学人文棟二階会議室(一二)、プラザホテル寿(一四)、九州大学六本松キャンパス本館二階・第一会議室(一六・二五)、広島大学東広島キャンパス教育学部A棟一〇三号室(一七)、活水女子大学東山手キャンパス四号館二階会議室(二四)。

このように会場名を列挙すると、懐かしさがしみじみとこみ上げてきます。そして、それぞれの場所での出会った人と言葉と光景が生き活きと思い出されます。しかし、二六回中一五回を開催した六本松キャンパス大学院棟一〇一号教室については、人と言葉と光景の記憶が錯綜してしまい、それらがいったい何回目のものであったのか判然としません。それが拠点の拠点たるゆえんなのでしょう。「失われゆく風景は内在化する」。全ての会場に感謝します。

それでは皆さん、次は西新プラザでお会いしましょう。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一一六五二〇 福岡市中央区六本松四一一一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>